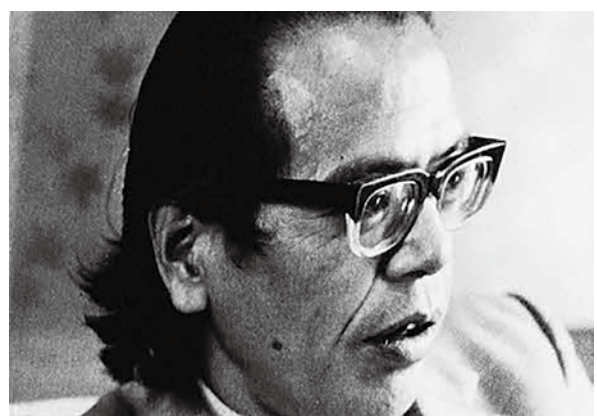


郷土の偉人を紹介するために、平成26年阿南市文化協会から「阿南市の先覚者たち第1・2集」が刊行されました。  
阿南市の発展に尽力された人たちの偉業を顕彰し、後世に語り継ぐために、27人の先覚者たちを奇数月に掲載して紹介します。

文学ひとすじに生きた作家

佃 實夫

佃 實夫は大正14年12月27日、那賀郡新野町（現阿南市新野町）の雑貨品等を扱う商家に生まれる。15歳で郵便局員に採用され、海



佃 實夫

部郡由岐町（現美波町）の由岐郵便局に勤務した。この時、實夫が生涯の文学の師と仰ぐ農民作家悦田喜和雄と出会い、作家として強い影響を受けることとなる。

終戦後、徳島大学学芸部の前身であった青年師範学校に在学中、實夫にとって初めての文芸誌「うるほひ」を発刊する。しかし、實夫が病に倒れ学校を去ってすぐに「うるほひ」も廃刊となってしまう。

生活のために貸本屋や古本屋を営むがうまくいかず、住居も転々として生活も安定しない日々が続いた。

昭和23年、文学活動の友人の妹陽子と結婚。終戦後の混沌とした時代の中、2人の苦闘している様子が、陽子の著書である「リスボンは青い風」に書かれている。

こうした生活を送っていた實夫は、図書館司書の資格を取得し徳島県立図書館に就職したことから、ようやく生活も安定しはじめ、文学や創作活動も活発になる。

昭和34年には文筆家のモラエスが芥川賞の候補に挙げられ、その時の選考委員の1人であったノー

ベル賞作家の川端康成は實夫の才能を高く評価し、後日手紙を送って励まし、時には自宅に招いたといわれている。

實夫は、東京に活動の拠点を移し、横浜中央図書館に勤めながら作家活動を続け、實夫の作品は高い評価を集めた。中でも、實夫が長年の図書館勤務の経験を生かして執筆した「文献探索学入門」は司書養成課程の基本書として採用される好著となった。その後も實夫は将来を大きく期待されていたが、昭和54年クモ膜下出血のため急逝、享年53、波乱に満ちた生涯を全うした。

現在、實夫が川端康成に宛てた手紙が徳島県立文学書道館に所蔵されている。手紙の内容は才能を惜しまれつつ早世した同郷（現阿南市下大野町出身）の作家北條民雄の碑の建立についての考えを、北條民雄の師であった川端康成に相談しているものである。



残された原稿類(県立文学書道館所蔵)

また、同館には几帳面であった實夫の原稿・取材帳・手紙・日記等が保管されており、實夫の作家としての仕事ぶりを伝えている。

参考資料  
「阿南市の先覚者たち 第1集」  
2014・阿南市文化協会

次回、作家「北條 民雄」を紹介  
します。